

事故防止に向けた安全対策

【ライフル射撃】

1 競技特性

(1) エアライフル

実弾を使い、的を狙う競技である。公安委員会より、銃砲所持許可を受けた者のみがエアライフルを扱える。得点の対象となる本射時間は最長で1時間30分であり、準備時間15分、試射時間15分を加えると合計2時間にも及ぶ長い競技時間となる。また、射撃中の揺れを抑えるために「射撃コート」という装具を競技時間中に身に付ける。射撃コートは硬いキャンパス生地できており、通気性・放熱性に欠ける。競技は各都道府県公安委員会が許可した射撃場にて行う。

(2) ビームライフル

光線銃を使い、的を狙う競技である。得点の対象となる本射時間は最長45分であり、準備時間10分、試射時間10分を加えると合計1時間5分の競技時間となる。光線銃（光が出るだけ）のため、公安委員会による許可が不要である以外は、エアライフルと基本的に同じ競技特性を持つ。

(3) ビームピストル

光線拳銃を使い、的を狙う競技である。射撃コートを着用せずに行う。それ以外は、基本的にビームライフルと同じ競技特性を持つ。

2 想定される事故事例と予防策

(1) 主として【施設・設備・用具】が要因となって起こる事故

| 想定される事故やけがの原因（事例） | 傷害例 | 予防策 |
|---------------------------|-----|--|
| ・暴発（過去、エアライフルの暴発による事故はなし） | ・外傷 | ・射座での空撃ちまたは射撃を認められているとき以外は、すべてのライフルに常にセフティフラッグを挿入する。 ・射座において銃器は常に安全な方向に向ける。機関部やブリーチは銃器が標的エリアの安全な方向に向けられるまで閉じない。 ・銃を置いて射座を離れるときまたは、射撃が完了したときは、銃の機関部を開放して抜弾し、セフティフラッグを挿入する。射座を離れる前に選手はそれを確認し、射場役員は銃の薬室、銃身または弾倉内に残弾のないこととセフティフラッグが挿入されていることを確認する。 |

| | | |
|--|--|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・競技中、銃器を手から離して置くときは、抜弾し、安全のため蓄気レバーまたは装填口を開けたままにしておく。 ・射撃線の前方に作業員がいるときは銃器を取り扱わない。また、セフティフラッグを必ず挿入する。 ・射座以外の射場内では、射場役員の指示による場合を除き、銃器は銃ケースに入れておく。 |
|--|--|--|

（２）主として【活動内容】が要因となって起こる事故

| 想定される事故やけがの原因（事例） | 傷害例 | 予防策 |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・暑熱環境下における長時間の練習等 | <ul style="list-style-type: none"> ・熱中症 | <ul style="list-style-type: none"> ・熱中症の兆候を自覚した場合、射撃を中断するよう、選手や顧問に積極的に勧め、熱中症への配慮を徹底する。 ・顧問、補助生徒は、射場に保冷剤や小型ファンなど体を冷やせる資材を常に携行し、選手が体調不良を訴えた際には、いつでも対応できるように準備をしておく。 ・競技中は補助生徒を選手１人につき１名以上を射座後方に待機させ、選手の健康状態を観察する。問題があった場合には速やかに射場役員や顧問に連絡する。 ・選手に水分補給を徹底させる。顧問は飲み物を持たずに射座に入ることを許可しない。 ・競技中は補助生徒を選手１人につき１名以上を射座後方に待機させ、選手の健康状態を観察する。問題があった場合には速やかに射場役員や顧問に連絡する。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・暴発や跳弾に巻き込まれる | <ul style="list-style-type: none"> ・脱水症状 ・外傷 | <ul style="list-style-type: none"> ・選手であっても射場役員の許可なく射座に入ってはならない。また、勝手に射座を離れない。競技中断中であっても射場役員の許可なく射撃線より前に出ない。これらを徹底させる。 ・その他、銃器の扱いに不安を覚える者を発見した場合には、射場役員、顧問にその旨を申し出るよう徹底する。 |

(3) 主として【環境条件等】が要因となって起こる事故

| 想定される事故やけがの原因（事例） | 傷害例 | 予防策 |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・熱中症・Ｊアラート発令時の対応 | <ul style="list-style-type: none">・熱射病、熱けいれん等 | <ul style="list-style-type: none">・WBGTが高いときや気温が急激に上昇し、暑さに慣れていないときは、練習時間を短くし、休憩をこまめにとる。・疲労が見られる者は、練習を中止して水分補給をして体を冷やし休憩する。・異常が見られたときは練習を中止して体を冷やし、回復が見られないときは救急車を呼び受診させる。・発令時の対応や様々な場面での避難方法について確認し、事前に参加者等に周知しておく。また情報収集の手段や関係者および保護者等との連絡方法について準備しておく。 |